

電信架設費之内献納致度 儀ニ付願	札幌ヨリ増毛迄電信架設 之儀計画ノ趣ニ敬承仕候。果 シテ然ラバ人民之幸福不過之 候。依之別紙調書之通奉獻納 度候間特別之御會議ヲ以テ右 御費用之内御差加被成下度此 段奉願候也。
明治二十年十月十八日 和歌山県紀伊国有田郡栖原村 當時天塩国留萌郡留萌村三十 三番地寄留	明治二十年十月十八日 和歌山県紀伊国有田郡栖原村 當時天塩国留萌郡留萌村三十 三番地寄留
平民 栖原角兵衛 代印 山本又三郎	平民 佐賀平之丞 代印 佐賀庄五郎
青森県陸奥国下北部下風呂村 平民 佐賀平之丞 代印 佐賀庄五郎	北海道後志国美國郡小泊村 平民 岩田金蔵 代印 鍋田庄吉
北海道天塩国留萌郡留萌村 平民 五十嵐綱治 北海道庁長官	岩村通俊 殿

の留萌の人口が一四〇四人た
らずであるから、その利用率
は発信で一・七七通に達し、
着信で一・八通にも達してい
る。これは明治二十六年の北
海道の利用率道民一人あたり
一・一三通を上回り、当時の
全国の利用率〇・一五通の十
二倍に達している。

これは当時の北海道が開拓
のための多くの移住者や出稼
ぎ者を受け入れていたこと、
商取引先が主に本州であった
ことなどによるのである。

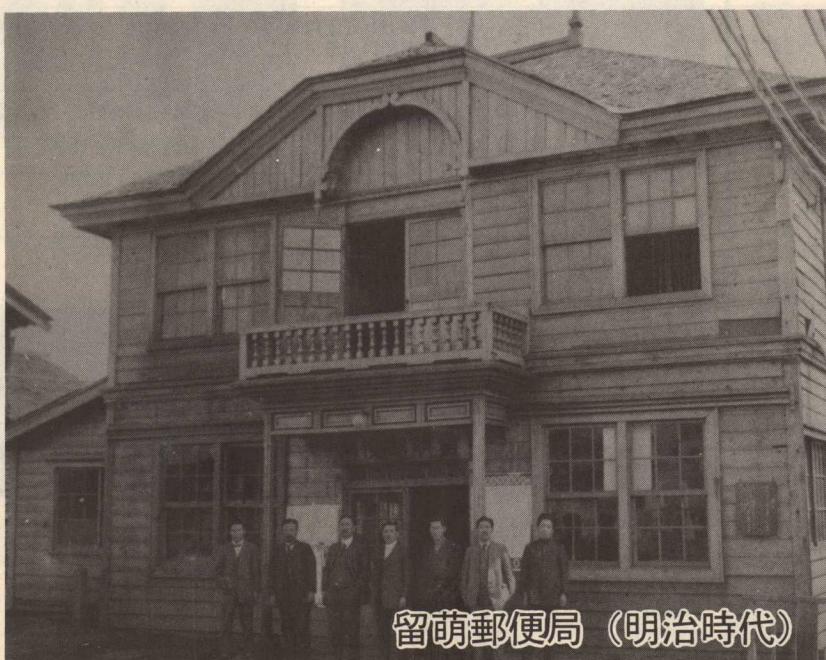
留萌は当時鰯漁が盛んであり、
鰯場の労働を本州に仰いでい
たこと、製品の販路が本州で
あつたことなどにより全道平
均より利用率が高かったこと
が考えられる。

また、電信の情報伝達の速
さは鰯粕のような相場による
値動きの激しいものに対し、
有効だったのである。これ
は明治二十四年の電信発信数

は公的なものが一九二通に対
し、私的なものが二二五通と
もあることから容易に推測が
つく。トントー、トントーと響く
着信の音が局内にこだまし、
片わらでは発信作業に忙しい
局員が次から次へと回されて

連載 ○お留萌ひがし 第十四話

●電信架設



くる電文を処理していく。上
場所での初鰯の便りが届く。
もう、電信局の鰯漁は始まっ
ていた。今年も大漁だ。局員
の顔もほころぶ。

が公的なものが一九二通に対
し、私的なものが二二五通と
もあることから容易に推測が
つく。トントー、トントーと響く
着信の音が局内にこだまし、
片わらでは発信作業に忙しい
局員が次から次へと回されて